
箱庭学園の裏切り者

音無 無音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

箱庭学園の裏切り者

【Zコード】

N1827BA

【作者名】

音無 無音

【あらすじ】

善吉のしたとある一つの相談から生徒会は開いてはならない箱を開けてしまった……！ 生徒会VS新クラス…不仲……

登場人物紹介（前書き）

内容に関わります

登場人物紹介

姫川 あやめ

クラス：1年1組

不仲 アウトキャスト

スキル：記憶欲

膝まである長い黒髪に無改造の制服。
冥利のように低い背が特徴。

他人を下の名前で呼ぶ。

妙高 泣

クラス：3年マイナス13組

不仲 アウトキャスト

スキル：リアルクロス変改突破

箱庭学園の夏服を着ている。
他人をフルネームで呼ぶ。

子安 休み

クラス：2年13組

不仲 アウトキャスト

スキル：外見反間

前髪をかきあげてカチューシャで止めている。
短いスカートのセーラー服にスパツツ。

目つきが悪い。

圭吾。

鴨島
かもじま
塘
ぬぐら

アウトキャスト

クラス：3年11組
不仲
スキル：夕焼け子焼け
キッズアイランド

かなやさん
金谷山
しべたか
標高
アウトキャスト

クラス：2年1組
不仲
スキル：標殺
キラー・キラー

ダブダブの学ランに金髪よりの茶髪。
塘同様、小さいが飛び級ではない。

緑色のチェックパジャマに茶髪のツインテール。
元気で小さい子供に見えるが一応飛び級なしの高3。

第一箱 「宣しへね」（前書き）

半ジャーンパーク/ミックス派ですので、色々なあなたです。

第一箱 「宣しくね」

安心院なじみとの戦いも終わって、学園…いや、生徒会にもやつと平和が訪れた。

* *

「なあ、めだかちゃん」

「何だ?」

「俺のクラスの奴のことなんだけどよ……」

「ふむ、成程」

善吉が話した内容は…

自分のクラスで出席率が悪く一度も顔を合わせていない奴がいる、という非常に簡単な話だった。

「それは…投書…もしくは相談に含めるが、よいな?」

「ああ、構わねえ」

「では…日安箱に基づき 生徒会を執行する…」

久々の投書が、事件を引き起しそうなことば、彼らはまだ知らない。

* *

「……で」

「ん?」

「なんで俺らも居ねえといけねえの!…?」

「私はあまり知り合いでないでのでな」

「俺もだよ！相談聞いてた！？」

と言う訳で、生徒会5人が1年1組に集まっているわけだ。

時間は3時50分。

「4時に来るよう言つてある

「ツカ！なんか言わなきやよかつたぜ」

「否！言わねばならぬのだ！貴様のクラスメイトの事情は私の事情だ！」

凛として言う。

55分になつた頃、教室のドアが開いた。“例の人物”がやつて来たのだ。

だらしなく長々と伸びた黒髪に、いじつていの制服。

なにより、冥利のように低い背が目立つ子だった。

「私、何か悪いことしたあ？」

「いや、投書があつてな。出席が悪いことでだ」

「そつかあ」

取り出したピンで前髪をパチンと止めた。

そして、膝より下にある残りの髪をポニー・テールにまとめた。

「私の名前は知つてるかな。めだか会長」

「ああ、知つてある…………あれ？」

「忘れてるねえ？じゃ、改めて」

ニヤリと不気味に笑う。

「私は姫川あやめ。宜しくね」

「…ふむ、姫川同級生か」

「どうせ、『また忘れちゃうよ』」

「…………は？」

「いやつ何でも無いよ。まあ、精々心ゆくまで“生徒会”ひつ」

を楽しんでね

ぐるり、とめだかたちに背を向けて歩きだす。

めだかは彼女を追うように言った。

「…どうこう意味だ？ 姫川同級生

「あやめは、めだかの方へは向かずに背を向けたまま言つ。『ど一いつもりも意味もないよ。めだか会長

こんどは、きちんとめだかを見た。

「私は君たちと敵対するつもりだけど戦う気もない。私は君たちと仲良くしたいけど友達なんて『メン』を。ゆっくり、ゆっくりね。最終回を待つよ。

…つと、口が滑つたみたい。忘れてね

* *

「…全く、なんだったのだ？」

「今までの敵とはなんかちが一よな

「うんうん、だよね。僕も思つ

「…！」

振り向くと、入口にいたのは安心院なじみ。

「そんな馬鹿な君たちに、僕からいくつか助言をしよう。椅子に座つて、どうせ長居する気なんだろ？

「彼女はね

“普通でもなく、特別でもなく、異常じやなけりや、過負荷でもないんだよ。

勿論、悪平等でも、ない。

そう、彼女はね。

『不仲』^{アウトキヤスト}

なのれ』

「あ…不仲?」^{アウトキヤスト}

「そ。仲間になれない仲間外れの能力者たちや、
ずずず、と用意されたお茶をすする。」

お茶を机に置いて、話を再開した。

「努力をしても報われない過負荷の^{マイナス}ように、
だがしかし、才能に優れた異常^{アブノーマル}の^{マイナス}ように、
能力に長けた^{スペシャル}特別の^{スペシャル}ように、
だけど、普通^{ノーマル}でもあるし、悪平等^{ノットイコール}でもあるのや。」

「……いまいちだな。つまり?」

「彼女はね、全てのクラスに所属できる…不仲というより、裏切り者だね」

第一箱 「宣しきね」（後書き）

お久しぶりで「jazz」ます！

「ノーマルによるスペシャルの為のアブノーマルなマイナス」 もしくは

「SOS団 IN 箱庭学園」 以来です！

確実ではありませんが、あの頃より多分能力上がつてますんで宣しくお願いします！！

再開して面倒だと思ったのはルビです…ひどいすぎますね…この作品の！

第一二箱 「俺は悪くない」

生徒会のメンバーが不仲のことを知つてから数日。
メンバーたちは会議を開いていた。

「……と言つ訳で最近周りに変化はあつたか?」

役員に問うめだか。

『……変化? うーん、転校生……かな』

「転校生だと?」

『? うん。僕のクラスにね』

変化は、事は、早く進みすぎていた。

* * *

ということで、球磨川は「転校生と接する」とこいつシヨンを
課せられた。

『……やっぱりめだかちゃん、まだ少し厳しいな
と、ぼやきつつも扉を開けた。

誰もいない教室。一箇所だけ、開いている窓。

『あれ?』

「ちゃん

ブチン、と。肉が切れる音がした。

* *

「球磨川……遅くねえか？」

「まあ……確かに遅いな……」

生徒会室で副会長くまがわの帰りを待つ4人。

そんな時、外でドサつと何かが倒れる音がした。

「? なんだろ……」

気になつたもがなが、廊下へ出たのだが……

「み……禊みちゃんあああああん！？」

という悲鳴に残り3人も駆けつけた。

そこに居たのは、血みどろになり倒れていた……球磨川だつた。

じうなつたのも、ほんの少し前。

彼が扉を開け、教室に入ろうとしたとき。 背後から“何かを巻かれた”。

“何か”とは、殺人で良く用いられる……ピアノ線だつた。首に巻き付けられ……気づいた頃にはブツリ

と。 肉の切れる音。 だが。

「ちゃん……つてあれ？」

『……ギリギリ……大嘘憑オールファイクき』

“切られなかつた”ことにした……らしい。

「ま！いーや。バレたのは同じだしー。

あ、俺の名前ぐらい知つてるよね？ 球磨川禊クラスメイト』

『……知つてるさ、妙高みょうこう涙るいちゃん……だよね』

「大正解！ボーナスポイント死ポイントゲット！」

ピアノ線をポケットにしまつて、球磨川へ飛びかかる涙。 そこ

へ躊躇なく、螺子を投げる球磨川。

そこ

涙はよける暇もなく、螺子は呆氣なくクリーンヒットした。

「……つって……いつたーい……」

両膝をついて倒れる涙。 球磨川の手は、止まっていた。

「な ん て な」

『が…ふ…！？』

今度膝をついたのは、一撃も攻撃を食らっていない球磨川だった。当の涙は、パツパと器用に手でホコリを払い立ち上がっていた。

「俺たち不仲は、
異常で特別で過負荷で普通な人間なんだぜ？」 何安心してんだよ

『あー……言つてたね……そついえば……』

『そつそ。言われてたから……“俺は悪くない”』

『…………』

「んじやま、おやすみん」

……という内容を、彼は伝えてくれた。

「すまなかつたな……」

「別に……舐めてかかつた僕が悪いわけだから
場所は保健室。 一時的避難だ。

「貴様たちも……気をつけておけよ……特に、転校生にはな
もがなたちに言つめだか。 これから……彼らには大きな試練が増
えていく。

* *

「はいはーい、こんちわー。

一年にして生意氣にリーダーしまーす、姫川あやめちゃんでーす。
いえーい」

ものすくく低いテンション（+棒読み）で言つあやめ。

「第一計画、『球磨川襷をツブす』じゃなかつた「」挨拶」はど
ーだつた？」

「完璧じやない？俺的にはね。ま、そんな傷もなかつたことにな
つたんだろうね」

「『オルフィックショ
大嘘憑き』が邪魔ですね」

あやめは、発言した田つきの悪い長髪の彼女の方へ向いた。

「そうだね、休さん」

発言した女子は、子安 休。2年13組に転入してきたのだ。

前髪をかきあげてカチューシャで止めた髪型^{スタイル}と、スカートの短い

セーラー服にスパッツという服装。

「ところで、あやめさんの“能力”で“記憶”することは?」

「うん、一応したよ。ありやー凄いね」

「……ほつ……」

「襷副会長は、私的に一番嫌いで一番好きな敵かな」

第二箱 「アラソヒ

不仲。^{アウトキャスト}

普通なのに 異常しくて。^{おか}

普通なのに 特別で。^{ひねくれ}

普通なのに 過負荷で。^{おんなんじ}

だけど、皆 悪平等で。

どこにも所属しない故に、全てに所属する彼らは。仲が良くないというよりも、仲間外れの裏切り者。

* *

球磨川が不仲にやられた当曰。^{アウトキャスト}

この学校に何人転校してきたのが少しだが、分かつた。 一元々い
たあやめ、マイナス十三組には涙、十三組には休。
更に考えた結果、

“全てのクラスに入れるのなら、特別のところにでも居る”^{スペシャル}

ということにたどり着いた。 … だが。

「黒神さん、私のクラスに転校生なんていないよ？」

「俺もです」

そして三年にも、不在。

「ということだ？三人で私たちに挑む気か？」

『もう少し不真面目に考えるんだよ、めだかちゃん
「だ、だが……』

『相手は、過負荷でもあるんだからね
ほくたか』

「…………」

「だから、”どのタイプ”にも対応できるように、考えないといダメなんだ。

一番面倒で大変で、最も強い。

「…意見なんだけど、相手の能力が変だと想つの」と、もがな。確かに言われてみれば変だ。

「あの黒神さんが名前を忘れてるんだよ？おかしいよね」

「何故あのとき、めだかは名を言えなかつたのか。そして、オールフ大嘘憑きがあるはずの球磨川が何故負けたのか。

まあ、彼が勝つことは…あまりないのだが…。

「えーっと、姫川…だけ」

「あ…ああ、姫川同級生、だ」

「なんか…“忘れる”つて…田之影先輩みたいだよな」

「確かに…な。だが、あそこまでオーバーでもないぞ」

“存在”は憶えているのに、“名前”だけ忘れていた。

「…謎が多いな」

* * *

「こん二ん、ど。 2年13組にノックの音が響く。

入ってきたのは

緑色のチエックパジャマに茶髪のツインテールの娘と、ダブダブの学ランを着た金髪よりの茶髪の子。

「やあ、やつと来たね」

と、迎えたのはあやめ。

「ハジメまして…、よぐり埼さん」

「はあーいっ こんちわ」

と、小さいパジャマつ娘・鴨島かもじま 塙ねぐらが答える。

「こんにちは、しふたか標高しふたかくん」

「うん！よろしくね」

今度も小さい。かなやさん学ランつ子・かなやさん金谷山しふたか標高しふたかが答えた。

「さて…揃つたかな」

「あやめさん、涙さんは？」

「ああ、安心して休さん。今着替えてるんだ。この学校の制服にね」

「そうですか」

あやめは、ニッと笑いこゝり言つた。

「そろそろ、仕掛けますかね」

その仕掛けは、意外と早くに起きた。

「め…めだかちゃん…！…！… と、投書が…」

「む？別になんともないではないか」

「ちげーんだよ…！…その…不仲アウトキャストからなんだ！」

「な…に？」

内容は……

こんにちは。裏切り者です。

私たちは、第四体育館で観客を集めて待っています。

だつた。

「…まずい！観客が…！…」

五人は、体育館へ急いだ。

第二篇 「アリヤ」（後書き）

【話題】

オリキヤラの名前は私の住んでいる地域からです。
そしてこの中のどれかが私の住んでいる団地の名前です（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1827ba/>

箱庭学園の裏切り者

2012年1月8日21時51分発行